

サイレンの語るもの

—ミュージックサイレンの歴史と現状—

What the Siren tells : History and Current Status of Music Sirens

兼古勝史 (共栄大学) ・小林田鶴子 (神戸女子大学)

Katsushi Kaneko (Kyohei University) , Tazuko Kobayashi (Kobe Women' s University)

(キーワード)

サイレン、サウンドスケープ、音楽時報、戦争、記憶

1. はじめに

戦後の昭和の日本の各都市の音風景を彩ってきた音のひとつにミュージックサイレンがある。ヤマハ株式会社が開発した音楽の吹鳴が可能なサイレンである。本研究では、その歴史と経緯を踏まえながら、ミュージックサイレンとは何か、浜松の事例を中心に、他地域の事例にも触れつつ検討する。

本研究は2018年夏～翌春に行われた日本サウンドスケープ協会 (SAJ と略) 研究プロジェクト (筆者らもそのメンバー) の現地調査 (上野, 兼古, 2019) 及び筆者らの独自追加調査に基づくものである。

2. ミュージックサイレンの誕生

ミュージックサイレンとは、複数のサイレンを組み合わせてメロディを奏でられるようにしたヤマハ独自の信号音システムの名称。戦前から工業・軍需産業の拠点として発展してきた浜松市は、太平洋戦争末期約30回に及ぶ激しい空襲に見舞われ、市民3,000人以上が命を落とした。戦後、工場からのサイレンが空襲警報を思い起こさせるとの声があり、当時の日本楽器製造 (後のヤマハ) 川上嘉市会長の発案により開発に着手したものである。

1950年8月、初号機が完成、浜松の街にその音色が響いた。到達距離は半径4~5キロ、風に乗ってさらに遠くまで届くこともあったという。初号機には

演奏用の鍵盤型のスイッチも繋がり、生演奏もできた。楽器メーカーならではのサイレンだった。

3. ミュージックサイレンの受容と広がり

ミュージックサイレンは、平和の時代を告げる音として広く浜松市民に受け止められ、定着していった。時刻の目安としても聞かれ、夕方のサイレンは子どもたちが遊びをやめて帰宅する合図になっていた。戦後間もない頃は、ミュージックサイレンのメロディが子どもたちが音楽と出会う希少な機会でもあったという。当時の市の観光パンフレットにも記述されるなど、楽都浜松を象徴する音として浸透し、2007年には市が公募した「浜松市音・かおり・光資源100選」に選定され、地域のシンボルサウンドとして親しまれてきた。

1951年には製品化され、市役所や百貨店、工場などの時報として国内外に184台が設置された。87年にはMIDIの技術を応用した第2世代サイレンが実用化され12台が設置された。

4. 各地のミュージックサイレンを捉える視点

全国各地のミュージックサイレンは、その設置意図や運用、使用楽曲や聴取の状況が様々ではない。兼古が提案した「ミュージックサイレンを捉えるための視点」 (兼古, 2019) の中から4つの

表1 ミュージックサイレン捉える視点 (兼古の提案した14の視点から4つを抽出し小林が分類し表を作成)

	浜松 (ヤマハ本社)	伊賀上野 (市庁舎)	天理 (天理教本部)	大分 (トキワバート本店)
聴かれるコミュニティ	従業員→一般市民	一般市民	信者	来店者・従業員→一般市民
告げられる時間	始業、休憩、昼食、終業時	7、12、18、22時	14時 (教祖の没時刻)	10時、12時、19時
設置の意図 (理由・目的・期待された役割)	従業員の労務管理、空襲の記憶の払拭、工場サイレン騒音問題への対応、楽器工場、楽都の象徴	火災警報との差別化、帰宅を促す、青少年の非行の予防	教祖を偲ぶ (サイレン吹鳴時は、信者は神殿に向かって拝礼して聴き、その後、拍手を打つ)	開店 (10時)、閉店 (19時) の合図、店舗のアピール、従業員の労務管理
吹鳴される楽曲	「殖生の宿」「菩提樹」「家路」「アラバスク」「蛍の光」等	ベームの「朝」、芭蕉より「さまざまのこと思い出す桜かな」「家路」パラムの「子守歌」	「みかぐらうた」(祭典でいつも謡われるもの)の一部	「アニーローリー」「花嫁人形」

項目に基づいていくつかの事例を比較してみたい。

浜松と大分は楽器会社と百貨店という企業に設置され、従業員の労務管理という役割は共通しているが違いも多い。伊賀上野は公的施設でありその対象者は多くなっている。天理は特定宗教の信者という限られたコミュニティに対してのもので、教祖の追悼という特別の意味があり、東日本大震災発生時刻や終戦の日にサイレンが追悼の意味で鳴らされることと共通している。楽曲に西洋クラシック音楽や愛唱歌が多いのは、ヤマハの音楽普及戦略との関係で興味深い。地域によってカスタマイズ可能であり、伊賀上野や天理のように日本音階を使った独自曲が用いられるケースもある。

5. 消えゆくミュージックサイレンとその記憶

時代は移り、防災無線や腕時計、携帯端末の普及、百貨店の閉店や設置場所の老朽化などにより、ミュージックサイレンは年々減少し、現在稼働するのは全国で僅かに5台となっている。2018年末、本家ともいべき浜松のミュージックサイレンが吹鳴終了となったが、このことは近隣住民にどのように受け止められたか。SAJによる住民への聞き取り調査(上野, 兼古, 2019)では、「(吹鳴停止の回覧板は)ある意味訃報。」「やっぱり物足りない。」「なくなってめちゃくちゃさみしい。」「せめて映像や録音の記録として残してほしい。」との声が聞かれた。子供時代の思い出や地域が華やかなりし時代の街の記憶とミュージックサイレンの記憶が重なっている事例が確かめられた。

6. ミュージックサイレンの価値とは何か

現代におけるミュージックサイレンの価値はどこにあるのか。楽器としての希少性、改良型サイレンとしての技術的価値、産業遺産、地域のシンボルサウンド、戦争と平和・昭和の時代の記憶の依り代、音の文化財…。様々な角度からその価値を検討することが可能である。だがもっとも重要なことは、戦後60年以上の長きに亘って同一の地域で、その音色とメロディが奏で続けられてきた点にこそあるだろう。子供も両親も祖父母も親戚も友達もその音を聴いて育ち生きてきたのだ。地域の中で世代を超えて鳴り続け、聞き継がれてきた音には大きな潜在力がある。そこには、音によって人々がつながる音響共同体 = Acoustic Community の、共時的・空間的な広がりとは異なるもうひとつの重要な位相、時代と世代を超えてつながる広がり姿が見えてくる。

参考文献

- 上野正章、兼古勝史 (2019), 「ミュージックサイレンをめぐって～ミュージックサイレンの歴史と現状」, 『日本サウンドスケープ協会 2019年度シンポジウム「音風景は文化遺産となりうるか」プログラム』, pp.17-24
- 兼古勝史 (2019), 「伊賀上野と浜松 ミュージックサイレンを捉える視点」, サウンドスケープ 19巻, p.109